

H I E
比 恵 76

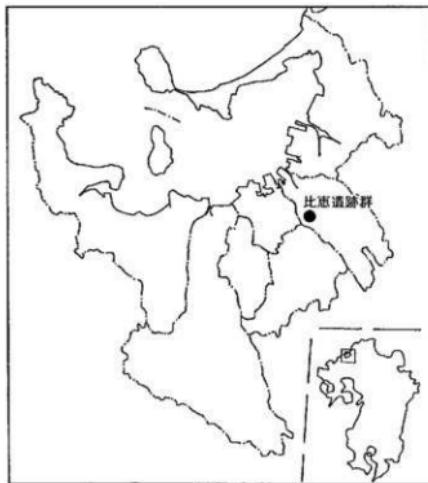
— 比恵遺跡群第 136 次調査報告 —

2017

福岡市教育委員会

H I E
比恵 76

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1319 集



調査番号 1448
遺跡略号 HIE-136

2017
福岡市教育委員会

序

現在、九州の中枢都市として発展をつづける福岡市の人口は増加の一途をたどっています。そして、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため、発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、本市博多区博多駅南3丁目において発掘調査を実施した比恵遺跡群第136次調査の記録を収録したものです。

調査の結果、弥生時代前期から中期にかけての集落が確認され、貴重な資料を得ることができました。

調査に際し快くご理解とご協力をいただきました株式会社ランディックアソシエイツ様には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係者各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は株式会社ランディックアソシエイツが実施した博多区博多駅南3丁目40番1地内における共同住宅建設にともなう事前調査として、福岡市教育委員会が平成26・27年度に実施した比恵遺跡群第136次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は日本測地第2座標系による座標北で、磁北はこれに6°0'西偏する。
3. 調査区は予定建物を基軸として任意の5m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は西交点とした。
4. 遺構の呼称は略号化し、竪穴住居→SC・土廣→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。
5. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦・中村桂子による。
6. 本書に使用した遺物実測図は熊埜御堂和香子・山口朱美・米倉法子・加藤による。
7. 製図は副田則子・米倉・加藤による。
8. 本書に用いた写真は加藤による。
9. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
10. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II.調査区の立地と環境	5
III.調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 弓生時代前期の調査	6
3. 弓生時代中期の調査	9
4. 混入その他の資料	14
IV.小結	14

挿図目次

Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig.2 調査区位置図 (1/2,500)	3
Fig.3 調査区周辺測量図 (1/500)	4
Fig.4 遺構全体図 (1/300)	6
Fig.5 SK03・04・05・06 実測図 (1/40)	7
Fig.6 SK04・05・06 出土遺物 実測図 (1/4・1/3・2/3)	8
Fig.7 SC07 実測図 (1/60)	9
Fig.8 SD01 実測図 (1/60)	10
Fig.9 SD01 出土遺物 実測図.1 (1/4・15-1/6)	11
Fig.10 SD01 出土遺物 実測図.2 (1/4・28・29-1/6)	12
Fig.11 SD01 出土遺物実測図.3 (1/3)	13
Fig.12 SD01 出土遺物実測図.4 (1/10)	13
Fig.13 混入遺物実測図 (1/4・1/3)	14

図版目次

PL1 -1, 調査区遠景 (南東から)	
-2, 調査区全景 (南東から)	
PL2 -1, SD01 遺物出土状況 (北東から)	
-2, SD01 木器出土状況 (北東から)	
PL3 -1, SK03 (北西から)	
-2, SK04 土層断面 (南西から)	
-3, SK04 (南西から)	
-4, SK05 (東から)	
-5, SK06 (北西から)	
-6, SC07 (南東から)	
PL4 -1, SD01 土層断面 (北東から)	
-2, SD01 遺物出土状況 (北西から)	
-3, SD01 磚出土状況 (北西から)	
-4, SD01 磚36 出土状況 (南西から)	
-5, SD01 磚37 出土状況 (北西から)	
-6, SD01 土器15 出土状況 (北西から)	
PL5 出土遺物. 1	
PL6 出土遺物. 2	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市博多区博多駅南3丁目40番1地内において、株式会社ランディックアソシエイツより共同住宅建設計画の策定に当たって、平成26年12月9日に埋蔵文化財の有無の照会が埋蔵文化財審査課（現埋蔵文化財課）になされた事により始まる。申請面積は1,313.81m²、受付番号は26-2-809である。

申請地は過去に隣地で第68次、道路を挟んだ向かい側で第4次調査が実施されており、遺跡の遺存が極めて高いと判断されたため、駐車場部分と現況建物の解体終了後に確認調査を実施することとなった。確認調査の結果、対象範囲の北半部分で遺跡の遺存が確認された。結果を受けて遺跡保存の協議を行ったが、設計変更も不可能であったことから、遺跡の破壊を免れない建物部分に限定して記録保存のため発掘調査を実施する事となり、同社と福岡市との間で委託契約が締結された。

発掘調査は平成27年3月2日に着手、27年4月10日に全ての工程を終了した。

調査番号	1448	遺跡略号	HIE-136
調査地地籍	博多区博多駅南3丁目40-1番	分布地図番号	37(東光寺) 0127
調査地面積	1,313.81m ²	調査実施面積	335m ²
調査期間	150302～150410	事前審査番号	26-2-809

2. 調査の組織

【調査委託】 株式会社ランディックアソシエイツ

【調査主体】 福岡市教育委員会

(発掘調査: 平成26・27年度 整理報告: 平成28年度)

【調査総括】 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課 課長 常松幹雄

同課調査第1係長 吉武学

【調査庶務】 埋蔵文化財審査課 管理係長 内山広司(26年度)

管理係長 大塚紀宜(27年度)

管理係 川村啓子

【発掘調査】 埋蔵文化財調査課調査第1係 主任文化財主事 加藤良彦

【発掘作業】 山本千加子 中村桂子 野崎賢治 吉田哲夫 藤野幸雄 今村良輔 高瀬州

高瀬美代子 濱野幸男 吉岡正寿 原野容子 室井三太郎

【整理総括】 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課 課長 常松幹雄

管理係 入江よう子

【整理担当】 埋蔵文化財課調査第2係 主任文化財主事 加藤良彦

【整理作業】 国武真理子 離田慧 副田則子 三宅恵子

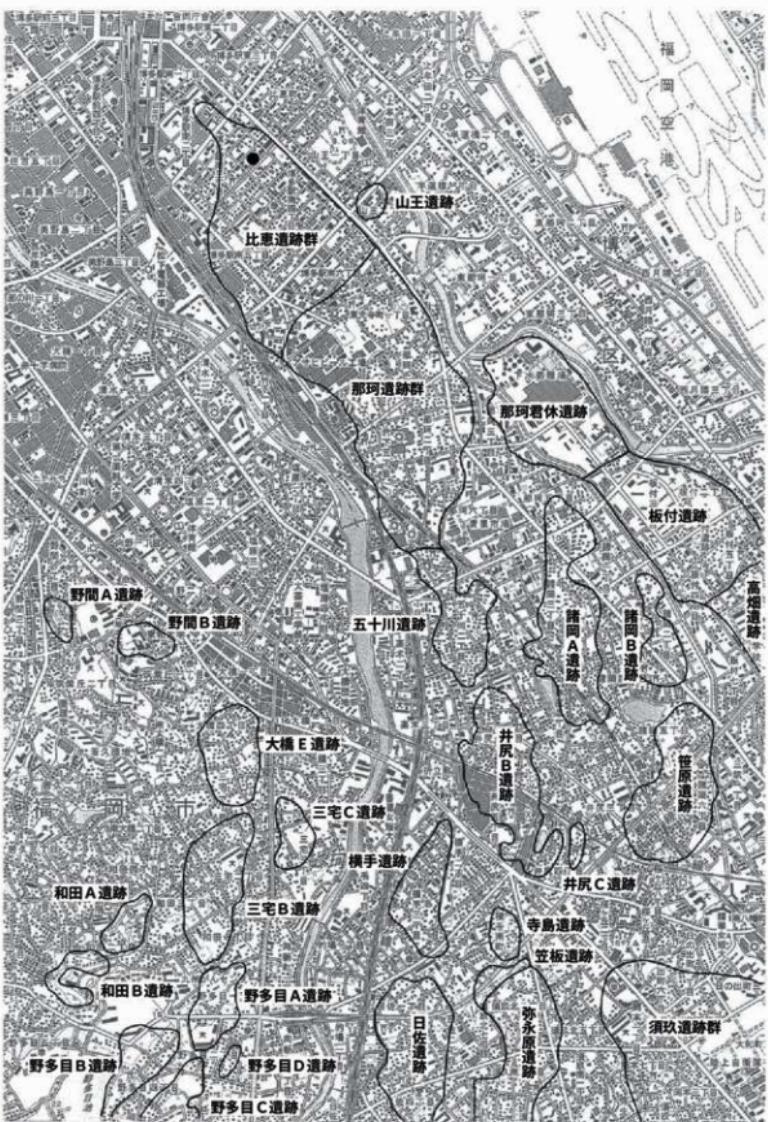


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

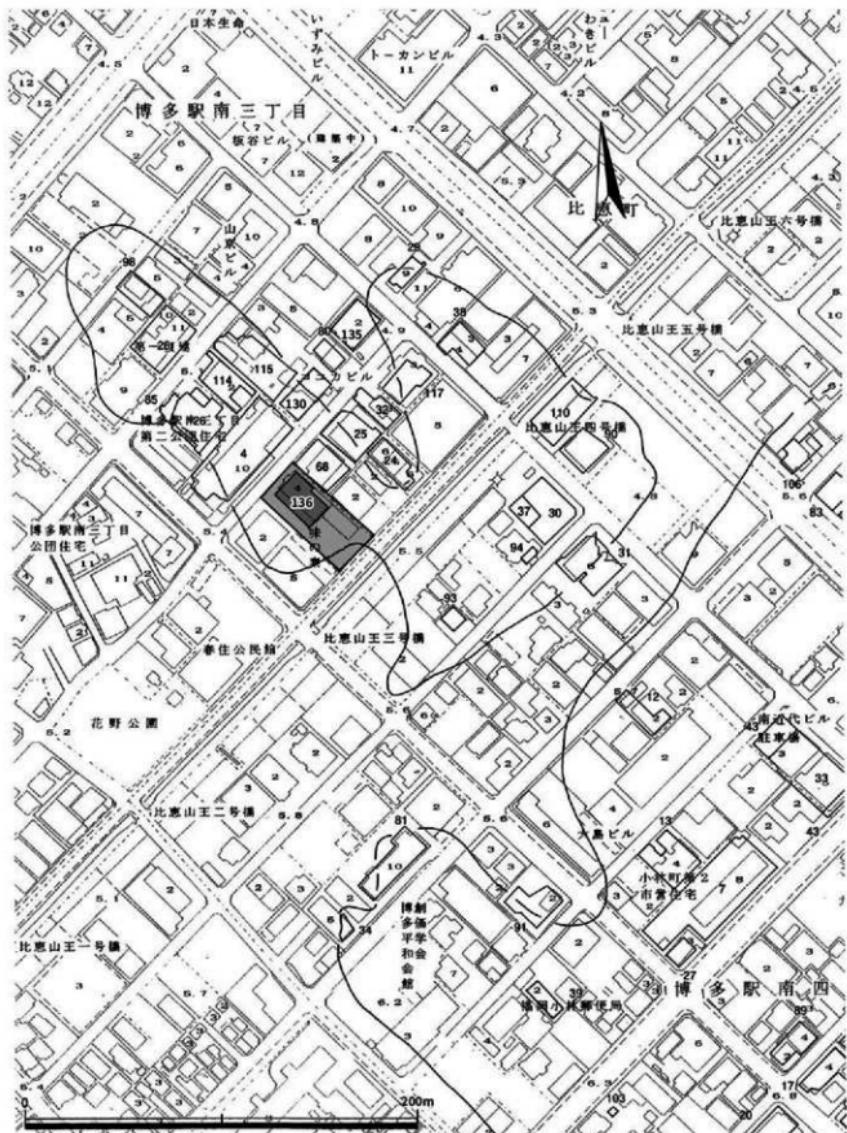


Fig.2 調査区位置図 (1/2,500)

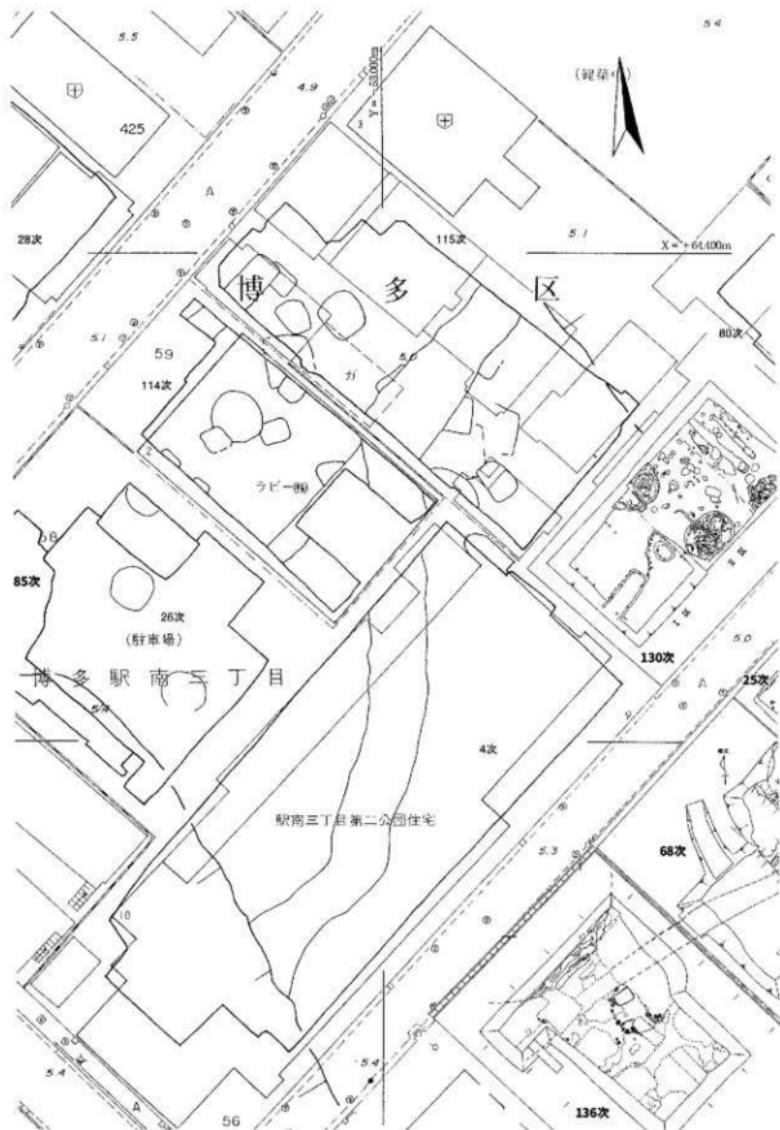


Fig.3 調査区周辺測量図 (1/500)

II. 調査区の立地と環境

本調査区(1)は福岡市の都心部より東へ2.8m、海岸線より南へ1.6kmの地点、福岡平野の中央部を流れる那珂川と御笠川に挟まれた北側の洪積台地上に位置する。

本調査区が立地する比恵・那珂遺跡群は、春日丘陵から断続的に長く延びる阿蘇山の火碎流堆積物(Aso4)による八女粘土層・鳥栖ローム層に覆われた洪積台地上に立地し、南の須玖遺跡群から北の井尻B遺跡・五十川遺跡・本遺跡群へと連なる、殊に弥生時代から古代にかけて中核域を示す重要な遺跡が分布する(Fig.1)。

本遺跡群は標高5~10m南北2.5東西1.0km程の範囲に広がり、台地縁辺部は那珂川・御笠川の開析作用により樹枝状の複雑な地形を成している。台地中央の東西方向の鞍部を挟んで便宜的に北部を比恵遺跡群・南部を那珂遺跡群と呼称しており、本調査区は比恵遺跡群31次調査区で確認された東西方向の河川により分離された北台地の、東西二つの舌上に細く伸びる、西側支丘陵の基部に位置する(Fig.2)。地表面標高は5.8mを測る。周辺では台地上で第4・26・28・68・98・114・115・130次調査が、谷部で24・25・32・80・135次調査など多数の調査が実施され、弥生時代前期～中期後半の時期を中心に、竪穴住居・貯蔵穴・貯木土壙・井戸・溝・水溜構造などが検出されている(Fig.3)。

遺跡群の歴史環境を概観してみると、後期旧石器時代のナイフ型石器・彫器等が区画整理による削平の浅い台地縁辺の比恵19次・那珂38・41次調査で検出され、散漫に分布する。縄文時代も同様で比恵30次調査で前期の深鉢が検出されるのみである。構造の初現は突堤文期からで、台地縁辺の低位部に展開し那珂37次調査では二重環溝が検出された。弥生前期は比恵では北西部を中心に、低位部に貯蔵穴・貯木土壙・水溜構造等が、前期末以降中期には集落が縁辺部から高位部に拡大し竪穴住居・貯蔵穴等が各所に広がる。また、集落周辺には壇棺墓群の形成も始まり、比恵6次調査では細型銅劍を副葬する中期初頭～前半の埴丘墓が、那珂21次調査でも中期中頃～後半の埴丘墓が検出されている。比恵東側沖積地の1次調査では中期中頃～後期前半の水田が出土。中期中頃以降は中央部に集住が始まるとともに、井戸・掘立柱建物が出現する。中期後半から後期に集落は爆発的に増加し、中期末から古墳時代前期前半をピークに遺跡範囲は100haを越え列島最大級の遺跡となる。青銅器・ガラス工房関係の複数地点での出土・多数の直線的な大溝・方形の区画溝の掘削・井戸の大量掘削・銅鑓・銅製鋤先・鉄器・水銀朱原料(辰砂)の多数出土等多くのものが高密度の拠点であることを、また広域の掘立柱建物群・半島系土器を含む広範囲にわたる外来系搬入土器の出土等交易の一大拠点であることを示している。古墳時代初頭後には須玖岡本遺跡が衰退するなか、交替に構造が微増し、延長1.5kmにわたる並列二条溝(道路?)の掘削・方形周溝墓群と那珂中央には全長85m九州最古期の那珂八幡前方後円墳の築造と、「奴国」の中核の移動を示している。古墳時代前半以降一時衰退するが、那珂で5世紀末に劍塚北前方後円墳築造以降集落が拡大し、6世紀代には竪穴住居と掘立柱建物群が数カ所に広がり、6世紀後半の3重周濠が巡る全長140mの東光寺剣塚前方後円墳築造時には集落が増大し、6世紀後半～7世紀中頃には比恵・那珂の集落から隔絶した高所に多重柵列・大型掘立柱建物群が数カ所で造営され、「那津官家」に関わる官衙的な建物群とされる。6世紀末以降官衙的な建物群は那珂に収斂され、7世紀中頃～末には正方位の溝が縦横に掘削され、瓦・硯の出土等官衙的な内容を濃くする。比恵79次調査では水域東門ルートの官道が検出されている。8世紀には那珂では継続して中心的な集落として維持されるが、比恵では減少する。

III. 調査の記録

1. 調査の概要

本調査区は比恵遺跡群北台地の、西側支丘陵の基部に位置し、第4次調査の南、68次調査の西側に隣接する。現地表面標高は5.8mである。

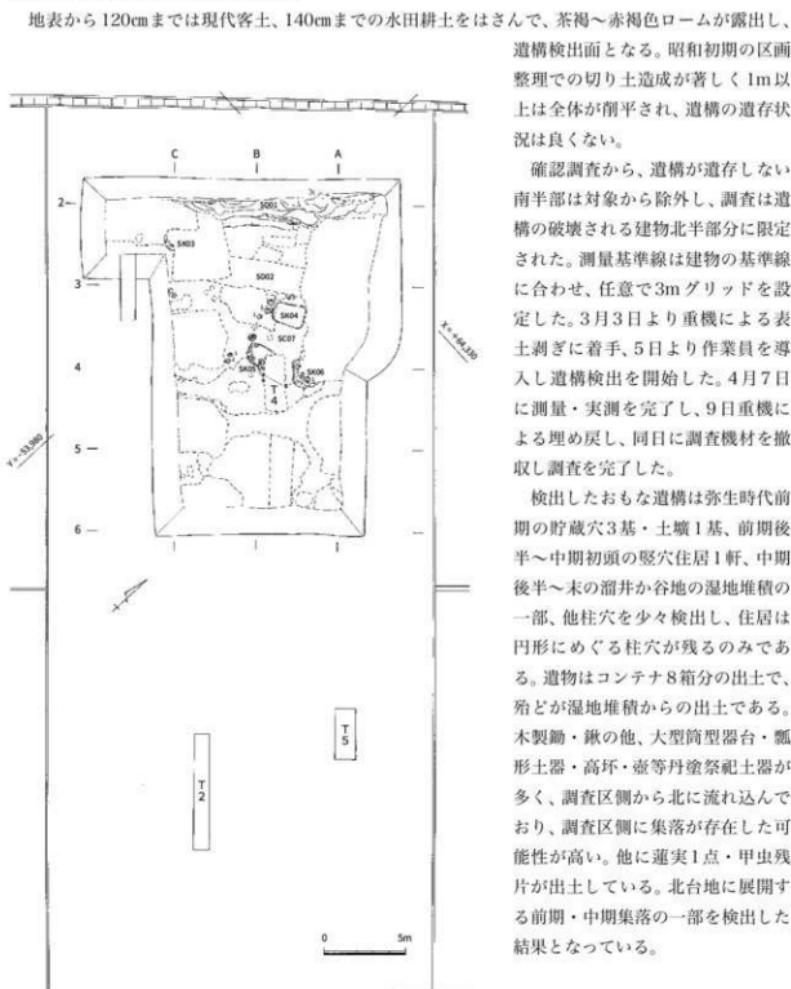


Fig.4 遺構全体図 (1/300)

地表から120cmまでは現代客土、140cmまでの水田耕土をはさんで、茶褐～赤褐色ロームが露出し、遺構検出面となる。昭和初期の区画整理での切り土造成が著しく1m以上は全体が削平され、遺構の遺存状況は良くない。

確認調査から、遺構が遺存しない南半部は対象から除外し、調査は遺構の破壊される建物北半部分に限定された。測量基準線は建物の基準線に合わせ、任意で3mグリッドを設定した。3月3日より重機による表土剥ぎに着手、5日より作業員を導入し遺構検出を開始した。4月7日に測量・実測を完了し、9日重機による埋め戻し、同日に調査機材を撤収し調査を完了した。

検出したおもな遺構は弥生時代前期の貯蔵穴3基・土壙1基、前期後半～中期初頭の竪穴住居1軒、中期後半～末の溜井か谷地の湿地堆積の一部、他柱穴を少々検出し、住居は円形にめぐる柱穴が残るのみである。遺物はコンテナ8箱分の出土で、殆どが湿地堆積からの出土である。木製動・鍬の他、大型筒型器台・瓢形土器・高环・壺等丹塗祭祀土器が多く、調査区側から北に流れ込んでおり、調査区側に集落が存在した可能性が高い。他に蓮実1点・甲虫残片が出土している。北台地に展開する前期・中期集落の一部を検出した結果となっている。

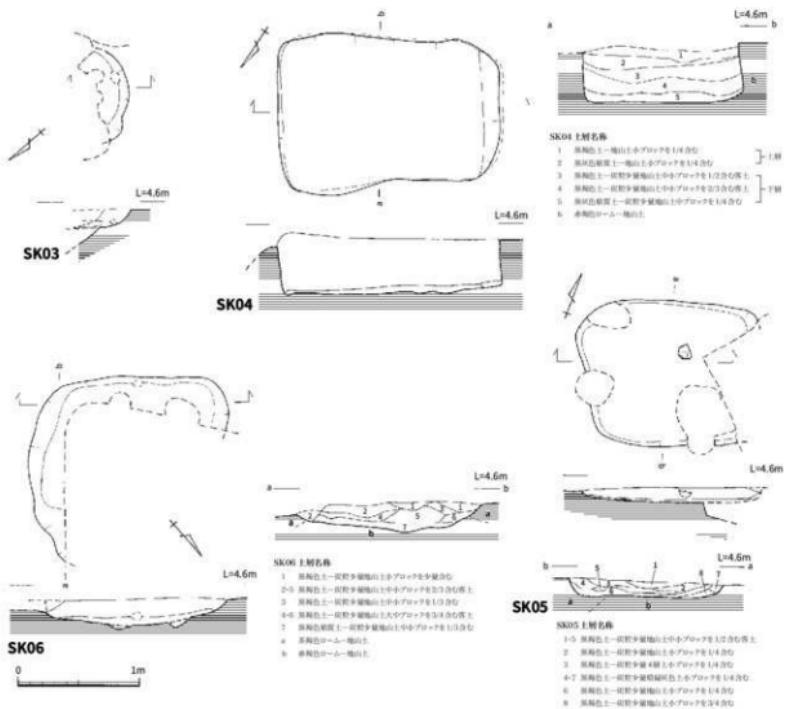


Fig.5 SK03:04:05:06 審査図 (1/40)

2 弥生時代前期の調査

前期の遺構は中頃を主に、土壙1基・貯蔵穴3基を、前期後半～中期初頭頃の竪穴住居1軒を検出したが、従前の削平と搅乱が著しく遺構全体を示しているとはいえない。遺存状況も深さ10数cmから残りが良好なものでも50cm前後を残すのみである。

1), 土壌 土壌は、調査区西隅で 1 基検出した。

SK03 (Fig5 PL3-1) D2グリッドに位置し、大半を擾乱に切られる。0.75×0.25m遺存し、平面円形プランで深さ14cmを測る。出土遺物は黒曜石剝片2点のみである。

2).貯蔵穴 平面長方形プランのものを貯蔵穴とした。調査区中央の5m程の範囲に3基分布する。

SKO4 (Fig.5 PL3-2.4) B3 グリッドに位置し、ほぼ全景を留める。長方形プランで $1.82 \times 1.3 \sim 1.15\text{m}$ 、深さ $50 \sim 40\text{cm}$ を測り、方位を N- 59° -E にとる。床面には若干の凹凸があり狭部側が 10cm 突上がり、壁面が数 cm オーバーハングする。黒褐～黒灰色粘土質が堆積し床上 $10 \sim 30\text{cm}$ には客土がなされ (3・4 層) 嵌上げされている。遺物は 10 数片の弥生土器片と石器が少量出土している。

出土遺物 (Fig.6 PL5) 1は緑灰色頁岩製石包丁。全周に再利用時の2次調整が施され本来の刃部は遺存しない。紐通し穴を含め敲打のみで研磨は成されず、 $6.7 \times 8.3\text{cm}$ 厚4mmを測る。2は腰岳産黒曜石製石核。厚2cmの板礫で、主に上部剥離面を打面とし段階状剥離を施す。 $5.0 \times 2.5 \times 2.0\text{cm}$ を測る。

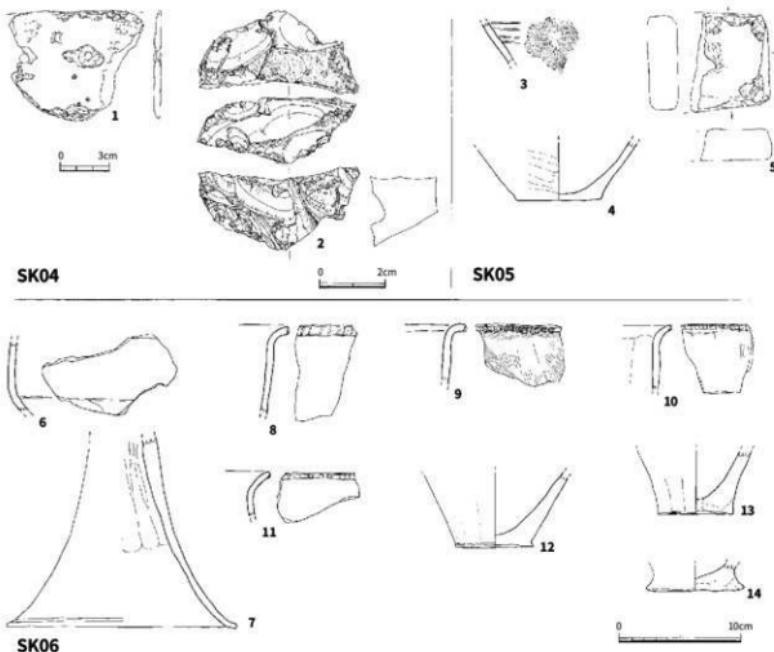


Fig.6 SK04・05・06 出土遺物 実測図 (1/4・1/3・2/3)

SK05 (Fig.5 PL3-4) SK04の南3mに位置し、東端部を攪乱に切られる。1.47×1.2m、深さ12cmを測り、方位をN-70°-Eにとる。床面は平坦で周縁は丸く立ち上がる。黒褐～黒灰色粘質土が堆積し床上7cmに客土がなされ(1層)SK04の堆積に似る。弥生土器片と石器が少量出土している。

出土遺物 (Fig.6 PL5) 3は壺の頸部から肩部にかけての小片で、外面にヨコナデ・粗いケンマ後4条のヘラ描き沈線を施す。内面はヨコナデ。黄橙～黒褐色を呈する。4は甕の底部で全周が遺存。底径7cmで、底部脇が若干窪む。外面に粗いナナメヘラナデ、内面にナデを施す。外面橙色内面純い黄橙～黒褐色を呈する。5は淡褐灰色細粒砂岩製の砥石。幅6.1×5.0cm。厚1.8cmを測る。層間に平行な平坦両面を砥面に用い、小口・側面には整形時の細かな敲打痕が残る。中央に一部叩石併用の敲打痕を残す。前期前半～中頃。

SK06 (Fig.5 PL3-5) SK05の東3mに位置し、床面の大部分を攪乱に切られる。1.58×1.42mを測り、方位をN-51°-Wにとる。床面は浅い皿状で最深部で25cmを測る。黒褐～黒灰色粘質土が堆積し床上7cmに客土(2・4～6層)がなされる。弥生土器片と石器がやまとまって出土する。

出土遺物 (Fig.6 PL5) 6は壺の頸部から肩部の小片で外面境が浅い段を成す。器表は摩滅で調整は不明。浅黄橙を呈する。7は高环脚部で径15.6cm。遺存は全周の1/6程。外面は黒色磨研がなされ、内面上部にはタテナデとシボリ痕が残る。内面は明赤褐色を呈する。8～13は甕。8～11は断面如意形の口縁で、8は口唇全面に、9～11は口唇下半にハケ工具小口で刻目を施す。8は調整不明で外面純い黄橙色、内面暗褐色を呈する。9は外面にタテナナメハケ内面にナデ、外面褐灰内面純い橙色を呈する。10は外面にタテハケ内面口縁

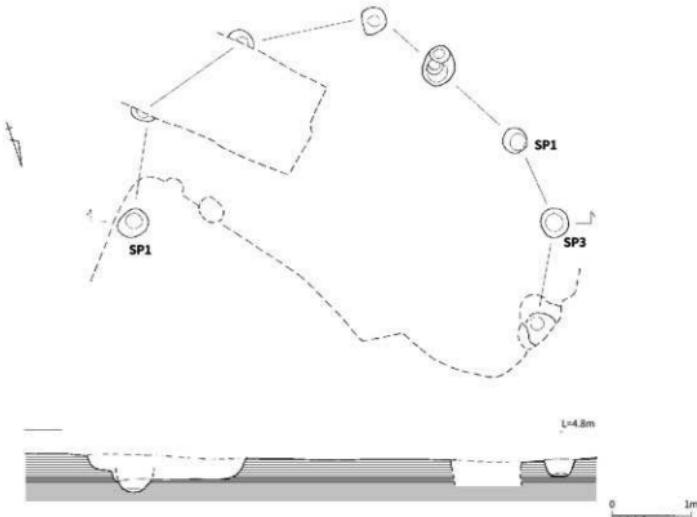


Fig.7 SC07 実測図 (1/60)

にヨコハケ後ヨコナデ、以下にタテユビナデを施す。外面褐灰内面鈍い橙色を呈する。**11**は調整不明で内外面浅黄橙色を呈する。**12・13**は底部。**12**は底端部が円盤貼付状に小さく突出する。底径6.3cmで、外底が若干上がる。外面にタテイタナデ、内面にナデを施す。外面鈍い黄橙～橙色内面明赤褐色を呈する。**13**は底径6.2cmで、底部脇がやや長くくびれ外底が若干上がる。外面にタテイタナデ、内面にナデを施す。外面橙色内面鈍い橙色を呈する。**14**は夜白式深鉢の底部で、外面端部が突出する。底径8.03cmで、内外面にナデを施し、外底に稍状の圧痕がある。外面橙色内面浅黄橙を呈する。前期前半～中頃。

3). 穴竪住居 穴竪住居は、貯蔵穴SK05・06を切って径5m程の円周上に柱穴が巡るものを円形竪穴住居の痕跡と判断した。

SC07 (Fig.7 PL3-6) B3 グリッドに位置し、西側中央を試掘トレンチで、北側を搅乱で削平されるが、径5.1mの円周上に径30～35cm・深さ20～40cmの柱穴が1.15～1.5mの柱間で複数個巡る。他の遺構の遺存状況から推察して、床面まで削平された円形竪穴住居の遺存と判断した。また、同円周上にピッチの合わない柱穴が數個存在することから、建て替えの可能性も考えられる。

出土遺物は各柱穴から前期と思われる弥生土器の甕小片が出土しており、柱穴が前期中頃と思われる貯蔵穴を切ること、北側の湿地堆積から中期初頭の遺物が出土することから、前期後半～中期初頭の年代間の遺構と考えられる。

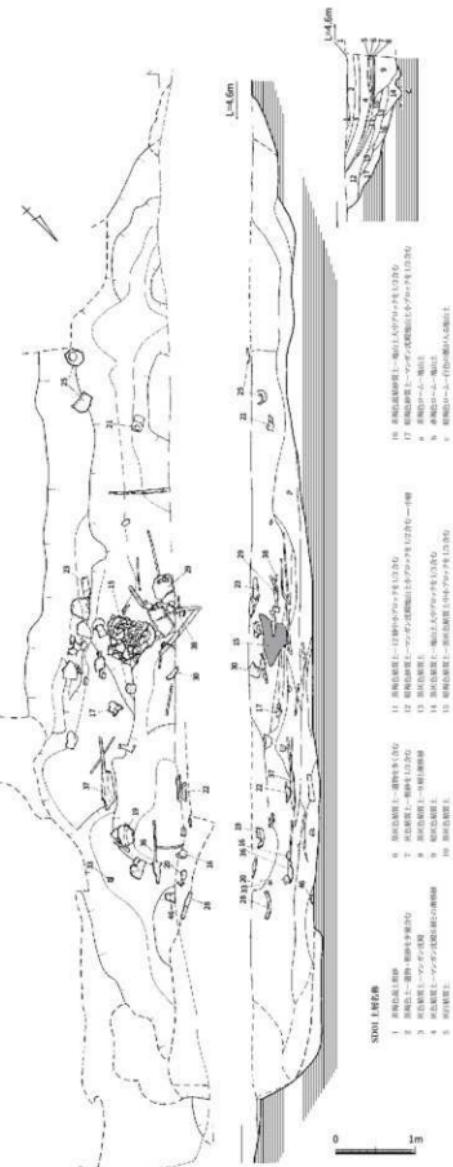


Fig.8 SD01 実測図 (1/60)

3. 弥生時代中期の調査

該期の遺構は、調査区北西端部で、中期後半～末の溜井か谷地の湿地堆積の一部SD01を検出したのみである。

SD01 (Fig.8 PL4) A～C2グリッドに位置する。緩い円弧状に長さ11.2m幅1.7m深さ70cmの規模で検出され、遺構の大部分が調査区外に広がる。土層は灰色～黒褐色粘質土が2～13cmの幅で薄く幾層も堆積し、激しい水流は伴わない。9・14層が堆積を大きく切っており、最低2回は底ざらえを行っている。この影響か、壁面・床面は凹凸が目立つ。遺物は9層から上に多く、出土遺物のコンテナ8箱分の殆どがここからの出土である。木製鍬・鍬の他、大型筒型器台・瓢形土器・高杯・壺等丹塗祭祀土器が多く、調査区側から北に流れ込んでおり、調査区側に集落が存在した可能性が高い。他に蓮実1点が出土しており、水が滲水していた証左となる。他に甲虫残片も出土している。

出土遺物 (Fig.9～12 PL6) **15～20**は壺。**15**は中央上部で破碎した状態で出土。大型の鋤先口縁壺で、口径34.5cm器高64.5cm。口唇内外端部を浅く窪め外端に刻目、頸部に1条胴部上半に3条の「M字」突帯を巡らせ、頸部以外に刻目を施す。口縁内外と胴部内面にナデ、以外は調整は不明。鈍い黄橙～灰黄褐色を呈す。**16・20**も鋤先口縁壺で、**16**は口径31cm、**20**は口径36cm。口唇に刻目を施し、橙色を呈す。**17**は小型壺で口径13cm器高14cm。口縁両端が若干突出する。全面にナデ、橙色を呈す。**18**は試掘時に出土した丹塗磨研注口土器。径1.8cmの注口を欠く。口径8.7cm器高13.3cm。口縁両端が突出し上面は丸い。**19**は瓢形壺で口径25cm。鋤先口縁で、頸部に1条胴部上位に2条の三角突帯を施す。器表は摩滅し調整不明。

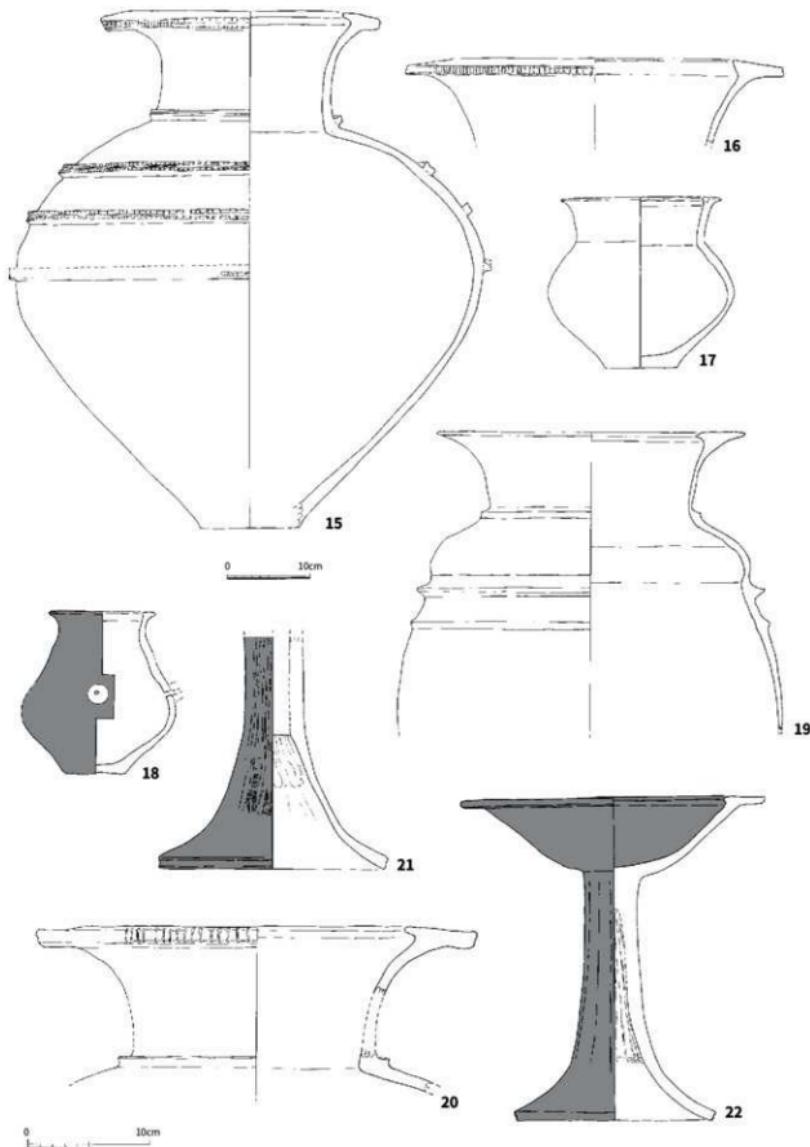


Fig.9 SD01 出土遺物実測図 .1 (1/4・15-1/6)

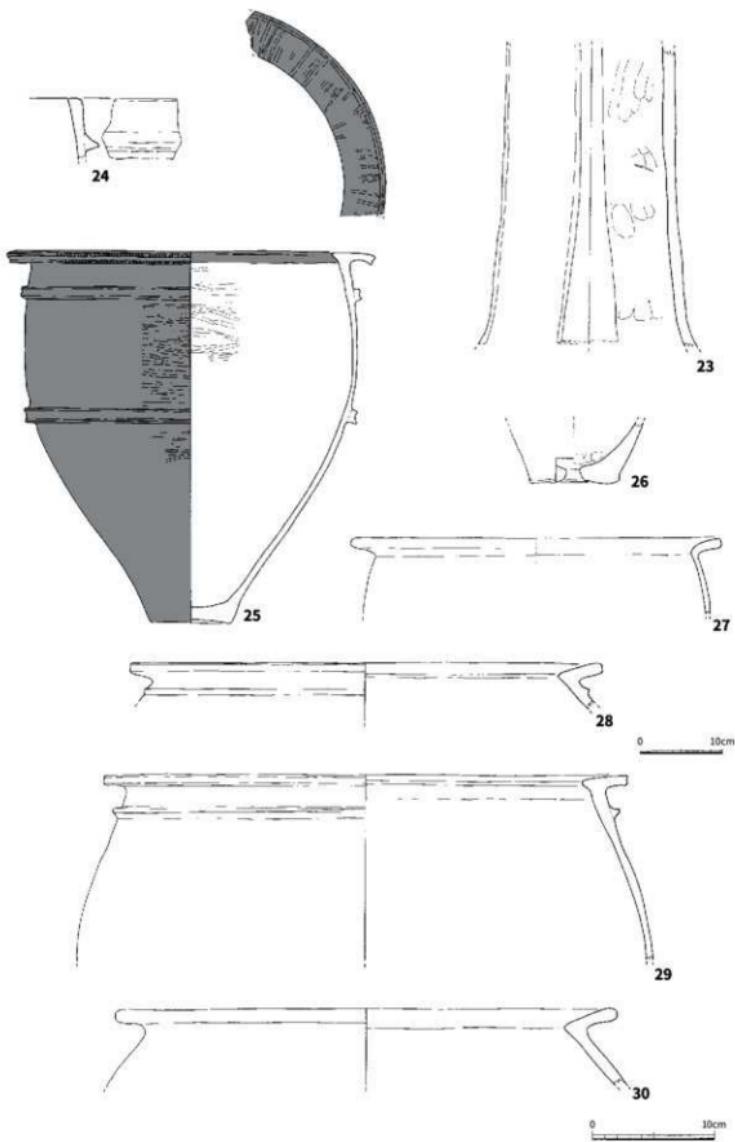


Fig.10 SD01 出土遺物実測図.2 (1/4・28・29-1/6)

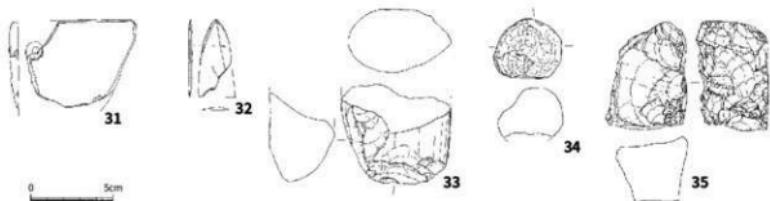


Fig.11 SD01 出土遺物実測図 .3 (1/3)

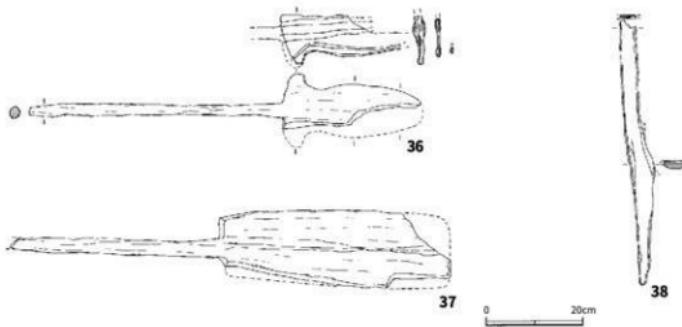


Fig.12 SD01 出土遺物実測図 .4 (1/10)

21・22は丹塗磨研高杯。脚端面を浅く窪ませる。**21**は脚のみで、外面下半にタテハケ後タテケンマ、内面にタテユビナデが残る。**22**は口径25cm器高26.5cm。鋤先口縁で脚外面にタテケンマ痕が残る。**23**は大型筒形器台の残片。径13.6～17.6cm。幅2.3～5.7cmの方形透かしを4孔穿つ。内面に指頭圧痕が残る他調整不明。橙色を呈す。**24**は樽形無頭壺。口径30cm程の小片。外面口縁下に三角突帯を施す。調整は不明。浅黄橙色を呈す。**25・27～30**は甕。**25**は丹塗磨研の甕。口径30cm器高30.5cm。鋤先口縁で窓めた外端面に刻目、胸部上位と中位に「M字」突帯を施す。口縁上面には放射状の暗文。胸部上半内外にはヨコケンマ痕が残る。**27・28・30**は「く」字口縁で、**27**は口径30.4cm。内面がやや緩い稜を成す。調整不明。橙色を呈す。**28**は口径59cm。口縁内面が明瞭な稜を成す。外面口縁下に低い三角突帯を施す。調整不明。橙色を呈す。**30**は口径41.2cmで、口縁内面が明瞭な稜で、外面口縁下にヨコナデ痕が残る。浅黄橙色を呈す。**29**は鋤先口縁で。口径65cm。口縁が若干内傾し外端を浅く窪める。外面口縁下に「コ字」突帯を施す。口縁から内面にナデ調整が残る。鈍い黄橙色を呈す。**26**は混入の前期瓶底部で底径7.4cm。底面中央に径1cmの焼成後穿孔を施す。内面に指頭圧痕とナデ、炭化物が薄く付着する。外底に初期圧痕が残る。淡橙～鈍い黄橙色を呈す。**31**はホルンフェルス製の石包丁成品片の転用で、右刃部に幅1.5・2.7mmの2段の磨痕があり石鋸に転用した可能性がある。5.3×6.8cm厚6mm。**32**もホルンフェルス製の磨製石鏃。表面に鏃が残り裏面は平坦。右端部を欠く。4.8×2.1cm厚2mm 1.9g。**33**は今山玄武岩製太型蛤貝石斧の刃部の叩石転用品。刃部を激しく叩き側面と中央に細かな叩痕が残る。6.1×6.8厚4.2cm 204g。**34**は玄武岩円礫の磨石。下面が2.3cm平坦に磨り減るまで使用し、周縁は叩きと磨りに用いる。4.2×3.7厚3cm 64g。**35**は玄武岩角礫の石核。上面に四周から調整した打面から、両側面に剥片剥離を行なう。6.6×3.8厚5cm 197gを測る。**36・37**は一本造りの木製鋤。取り上げ後水洗時に分解し、全体

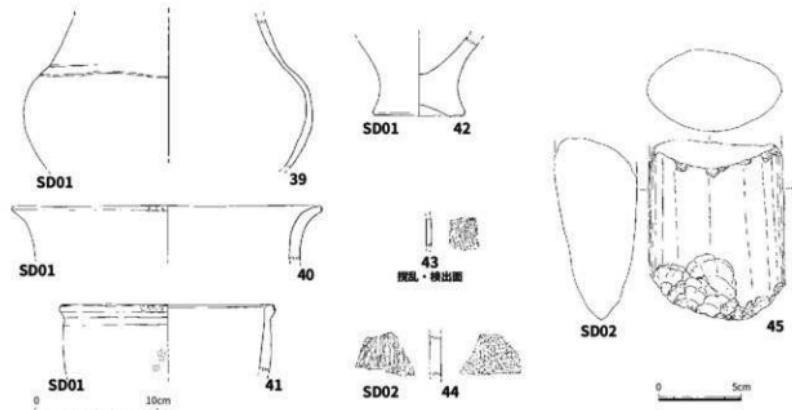


Fig.13 混入遺物実測図 (1/4 · 1/3)

は遺構実測図から、36は遺存部を実測して合成。37は現物が遺存しない。36は全長81cm、柄部52cm径2.6cm、茄子形の鋤身29cm幅推定15cm。上部両端が2cm程突出し、幅1.5厚1.3cm程の縁を削り出し、柄の延長部に厚みを持たせ2.8～0.4cmと先端に厚みを減する。板目。37は全長91cm、柄部42cm径3cm・長方形の鋤身47cm幅推定15cm。表面の柄の延長上が断面三角の削り出しとなり先端に厚みを減する。板目とおもわれる。38は二叉鍬の残欠。全長54cm、身部21cm厚7mm・刃部33cm厚1.7～0.7cmと先端に厚みを減する。板目。

4. 混入その他の資料

39は板付II b式の壺。40は板付I式の壺。口径25.4cm。41は弥生前期末の壺。口径17.6cm。42は弥生中期初頭の壺。底径7.5cm。43は古墳前期瓦質土器小片。外面に平行タタキ内面にヨコナデ・ケンマ。胎土精良で灰色。44は陶質土器壺小片。外面に網目タタキ内面に平行当具痕。外面灰色内面青灰色。45は今山玄武岩製大型蛤石斧の刃部。使用で刃部が激しく剥離する。11×8.3厚5cm。

IV. 小結

今回の調査では、弥生時代前期前半～中頃の貯蔵穴3基・土壙1基、前期後半～中期初頭の堅穴住居SC07を1軒、中期後半～末の溜井か谷地の湿地堆積の一部SD01、他柱穴を少々検出した。前期から中期に至るまで、検出されたのは生活遺構で、埋葬遺構は検出されていない。周辺の調査区と同時同様の遺構で、北台地の前期・中期の集落が当該地まで広がっていることが確認された。住居はSC07の1軒のみであるが、前期貯蔵穴の分布、湿地からの多量の中期遺物の検出から、前期・中期の住居は昭和初期の区画整理で削平され、残っていない可能性が高い。

遺物はコンテナ8箱分の出土で、殆どが湿地堆積からの出土である。木製鋤36は25次調査SK10の貯木遺構から類似品が出土しているが、これは前期末に比定されおり、時期差が明白である。

図 版

PLATES



1. 調査区遠景（南東から）



2. 調査区全景（南東から）



1. SD01 遺物出土状況（北東から）



2. SD01 木器出土状況（北東から）



1. SK03 (北西から)



2. SK04 土層断面 (南西から)



3. SK04 (南西から)



4. SK05 (東から)



5. SK06 (北西から)



6. SC07 (南東から)



1. SD01 土層断面（北東から）



2. SD01 遺物出土状況（北西から）



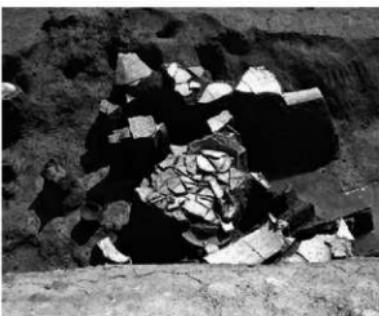
3. SD01 鋤出土状況（北西から）



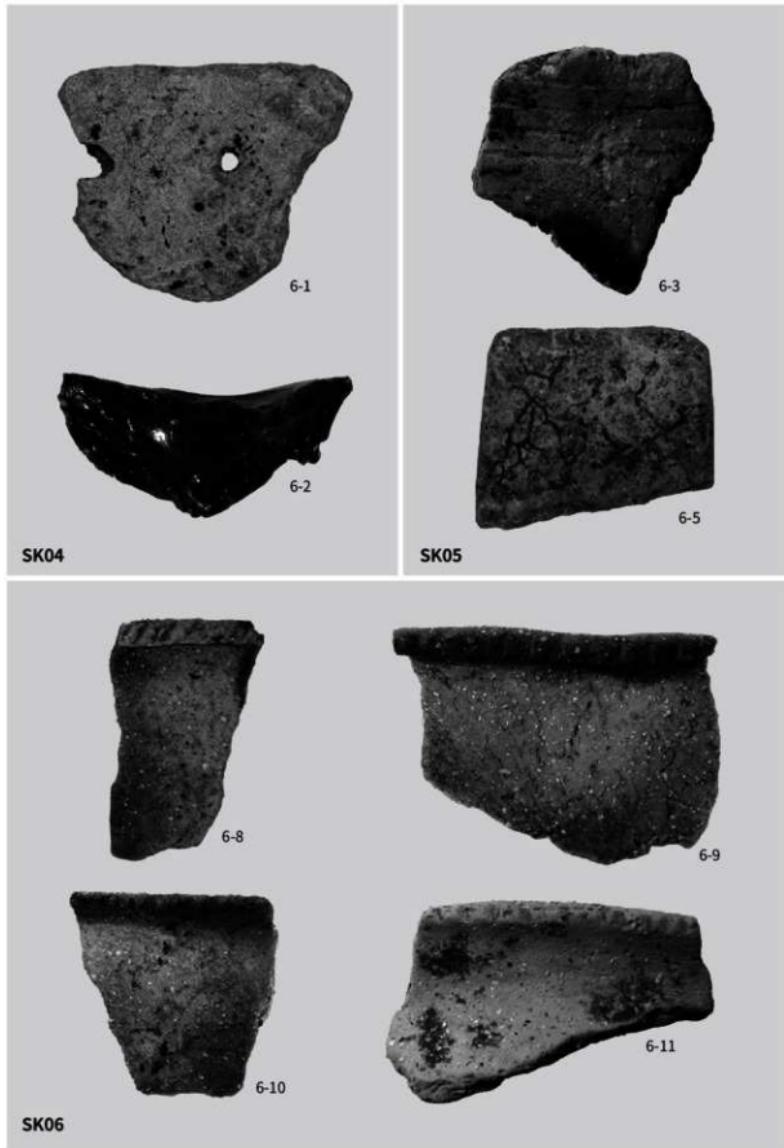
4. SD01 鋤 36 出土状況（南西から）



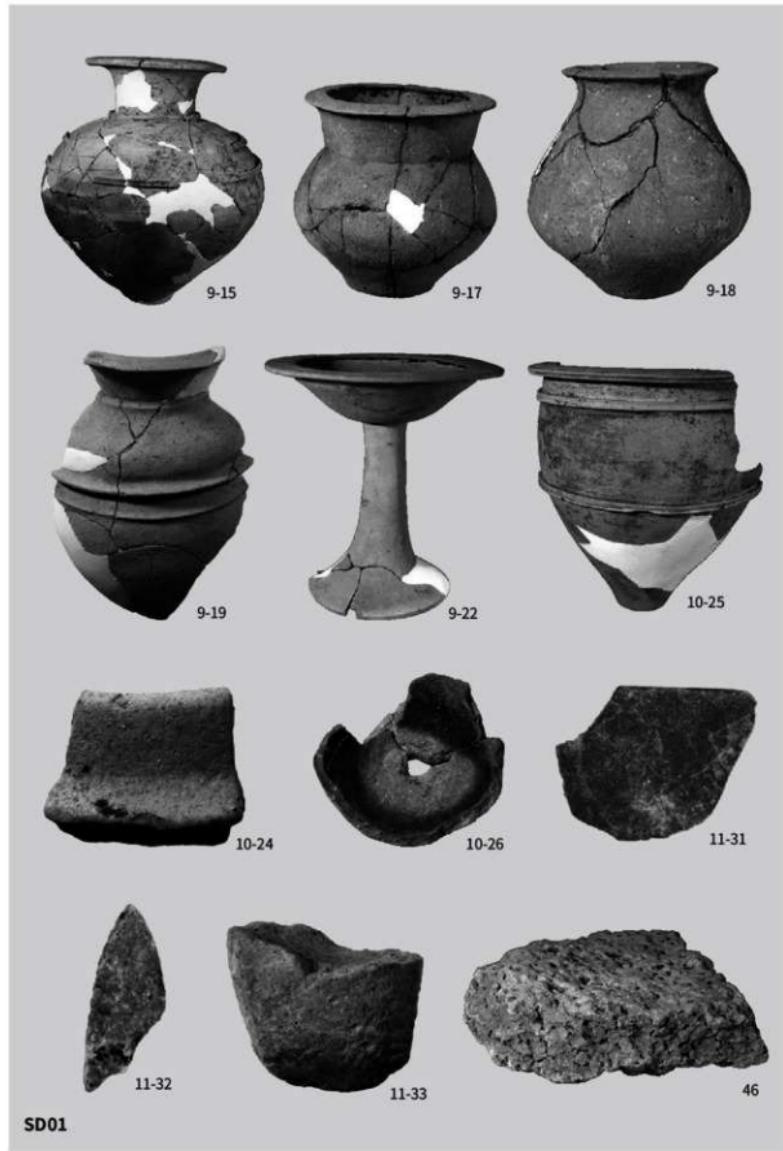
5. SD01 鋤 37 出土状況（北西から）



6. SD01 土器 15 出土状況（北西から）



出土遺物，I



出土遺物，2

報 告 書 抄 錄

比惠 76

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1319集

2017年(平成29年)3月27日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 末松印刷株式会社
〒812-0892
福岡市博多区東那珂2丁目4-36

